

ルーズベルトの前任者だった、ハーバート・フーバー大統領は回想録『フリーダム・ビトレイド』裏切られた自由』のなかで、昭和二十一（一九四六）年に占領下の日本を訪れて、マッカーサーと会った際のことを、次のように述べている。

「私はマッカーサー元帥と、五月四日の夕刻に三時間、五日の夕刻に一時間、六日の朝に一時間の三回、二人だけで話した。

私が対日戦争のすべての責任が、戦争にもつてゆこうとするルーズベルトの狂人の野望から発したと述べたところ、マッカーサーも同意した。

また、一九四一年七月の資産凍結が、挑発的であつたばかりではなく、凍結が解除されなければ、自殺行為になつたとしても、戦争をせざるをえない状態に、日本を追い込んだと、述べた」

「ルーズベルトが犯した壮大な誤りは、日本に対して全面的な経済封鎖を行つたことだつた。経済制裁は弾こそ撃つていなかったが、本質的には戦争であつた。ルーズベルトは、自分の腹心の部下からも、再三にわたつて、そのような挑発をすれば、遅かれ早かれ（日本が）戦争を引き起こすことになる」と、警告を受けていた」

第三章 大東亜会議と人種平等の理想

屈辱的な不平等条約の撤廃

日本が真珠湾を攻撃した翌年が明けた時点では、まだ地球上の大部分が、白人による支配のもとにあった。

人種の違いが同じ人間を、支配者と被支配者の二つに分けていた。人の価値が皮膚の色によって、決められていた。

日本国民は幕末から、二つの大きな悲願をいだいていた。

一つが、不平等条約の撤廃だった。嘉永六（一八五三）年に、アメリカのペリー艦隊が江戸湾に侵入して、幕府を要求に従わせると、アメリカをはじめとする白人の諸国によって、屈辱的な不平等条約が強いられた。

不平等条約のもとで、横浜、神戸をはじめとする開港地には外国の軍隊が駐留し、西洋列強による裁判所が存在した。日本は白人に対する裁判権を持っていなかった。西洋諸国が輸出輸入に当たる、関税率をきめるなど、日本は属国に近かった。

今日、外国から国賓が訪れて、皇居において宮中晩餐会が催される時には、フランス料理が供される。

しかし、中国で国賓をもてなす晩餐会では中華料理、韓国では韓国料理、タイではタイ

料理、インドではインド料理がふるまわれる。

だが、どうして日本では、フランス料理なのだろうか？

日本が西洋諸国によって強いられた不平等条約のもとで、明治に入った時には、西洋文明だけが真つ当な文化文明であって、他のすべての文化は、野蛮なものともなされていった。不平等条約を改正するために、日本も進んだ西洋の文明と、生活習慣を身につけた文明国であることを、示さなければならなかった。

そのために、現在、東京の日比谷公園の前にある帝国ホテルの隣に、鹿鳴館がたてられて、明治の顯官たちが夫人や、令嬢をともなつて、洋装をして、在京の西洋諸国の使臣を招いて、洋式の宴会を開き、仮装舞踏会を催した。

今日、日本では葬儀に当たつて、当然のように、黒い喪服を着ることが、きまりとなっている。しかし、明治に入るまでは、葬儀にはかならず白い服を着たものだった。明治政府が白衣を着ると、西洋諸国から野蛮国とみられてしまうから、黒服を着るように、全国に通達を出した。

明治初年に、文部省が全国の女学校に、女子生徒に立ち小便を禁じる通達を行った公文書が、のこっている。

朝鮮半島と中国には、女性が立ち小便をする習慣はない。私は少年期を長野県で過したが、婦女が田畑で立ち小便をするのを、見た。インドネシアのジャワ島を訪れた時に、女性が稲田の畦道で、立ち小便をするところを見て、思いがけなく稲の香が漂ってきたの
あわせて、懐かしさがこみあげたものだった。

白人が拒否した人種差別撤廃

もう一つが、人種平等の世界を招き寄せることだった。

幕末から多くの武士がアメリカや、ヨーロッパを訪れたが、その途中で、白人によって同じ有色人種が、牛馬か、奴隷のように酷使されているのを見て、憤った。

最後の不平等条約は、日本が日露戦争に勝ったことによって、ようやく撤廃され、白人の強国だけに限られていた列強の仲間入りを、唯一つの有色人種の国として、果した。日本が強国となったので、もはや差別を続けることができなかった。

その後も、日本国民は人種平等の世界を創ろうと、果てしない夢を、見続けた。

日本は人種差別の撤廃を訴え続けたが、アメリカや、ヨーロッパ諸国によって、拒まれた。

一九一九年にパリにおいて、第一次大戦のベルサイユ講和会議が開催され、国際連盟憲章が起草された時に、日本全権団が人種平等の原則を盛り込むように提案したにもかかわらず、アメリカ、イギリス、フランス、オランダなどの植民地諸国によって葬られたために、日本国民は深く落胆した。

日本の提案に、セルビアをはじめとするヨーロッパの小国が賛成票を投じて、日本案が多数決によって成立することになったところ、議長であったアメリカのウッドロー・ウィルソン大統領が、「このような重要な議案については、全会一致によらなければならない」と強弁して、否決された。アメリカはフィリピンを植民地としていたし、国内で黒人に対して人種差別を行っていた。

二十世紀に入ってから、白人の侵略がアフリカで続いていた。

イギリスは一九〇〇年に、アフリカ西部のアシャンティ王国（現在のガーナ中南部）の首都だったクマヒュを、一九〇三年にナイジェリア北西部にあった、ソコト首長国を攻略した。

さらに、フランスが一九一二年にモロッコを支配下に収め、その翌年、イギリスがエジプトの主人となった。

一九三五年に、イタリアが世界最古の王国といわれ、アフリカにおいて独立を二千年以上も保っていた、エチオピアを侵略した。エチオピア軍は槍や、手斧ておのを振るって善戦したが敵わず、翌年、皇帝がロンドンに亡命して、イタリアに領土として編入された。

第二次大戦前と大戦中に、アジアの民衆や、オーストラリア、ニュージーランドの先住民族や、アメリカの黒人が、日本を光として仰ぎ、日本がアメリカ、イギリス、オランダに対して戦端をひらくと、どれほど日本の勝利を願ったことか、当時の現地の人々による多くの手記や、回想が証している。

アジアからアフリカ、アメリカまで、有色の民は日本が第二次大戦に参入するまで、数百年にわたって、白人優位の世界秩序のもとで、人としての尊厳を奪われていた。

有色人種の光だった日本軍の進攻

緒戦における日本軍の進撃は、目覚ましかった。

日本軍は開戦とともに、イギリスが「東洋の真珠」と誇った香港をたちまち攻略し、イギリスの支配下にあったマレー半島、シンガポール、ビルマ、オランダの植民地だったインドネシア、アメリカが統治していたフィリピンを、翌年五月までに、つぎつぎと占領した。

肌の色がちがうために辱められ、惨めな境遇に置かれてきた人々が、日本の働きによって、重い鎖から解き放たれて、前途に眩い光を見た。

抑圧された有色の人々が覚醒するなかで、アメリカ、大英帝国、オーストラリア当局などが狼狽うろたえて、有色の活動家たちに対する取り締まりを強化することに、狂奔した。そのかたわら、有色の人々を懐柔するために、慌てて人種差別政策を緩和することを、強いられた。

白人たちにとって、日本軍の進攻によって、数世紀にわたった白人の優位が、打破されたことは、まさに驚天動地の出来事だった。

日本国民は、アジア人を「兄弟」としてみていた。日本の占領地域では、日本の将兵が白人とまったくちがって、同じアジア人に対して思い遣りをもって、対等に接した。

当時のアジア人や、アメリカの黒人による手記や、回想によれば、中国について、中国人が打算的で、白人に媚びていたのに対して、日本が決然として、白人と対決してきたことを、高く評価している。

日本が、先の大戦に敗れるまで、アジア・アフリカに君臨していた西洋人は、「白魔はくま」

と呼ばれていた。若者たちにとって、アジアを白人から解放しようと思えることが、時代精神となっていた。

日本が占領した地の地においても、このような思い入れが、現地の人々の独立への願いと共振し、アジア全域にわたって独立への勢いが、燃えさかった。

もともと、日本の勝利は、長く続かなかった。

開戦から七ヶ月後の昭和十七（一九四二）年六月に、海軍がミッドウェー海戦において惨敗して、主力の機動部隊を失った。

昭和十七年八月に、反攻に転じたアメリカ海兵隊一万九千人が、南西太平洋のガダルカナル島に上陸した。四千八百人の陸軍部隊と海軍陸戦隊を、慌てて送り込んで、奪回をはかったが失敗し、さらに二回にわたって、二個師団ずつ投入したが、アメリカ軍の圧倒的な火力によって、大きな損害を蒙って、翌年二月に撤退した。

アメリカ軍の反攻が本格化して、昭和十八（一九四三）年五月に、アリューシャン列島のアッツ島守備隊が玉砕した。十一月には、アメリカ軍がギルバート諸島のタラワ島、マキン島に上陸することになる。

有色人種のリーダーが集った大東亜会議

十月に入って、帝国議会（現在の国会）議事堂を取り囲む銀杏並木が黄ばみはじめると、大東亜会議に参加する首脳たちが、つぎつぎと東京に到着した。

大東亜会議は、開戦後三年目に入ろうとするのに当たって、日本の戦争目的を世界と後世へ向けて、宣明するものだった。

大東亜会議が十一月五日に、帝国議会議事堂において、開幕した。

日本の東條英機首相、中華民国国民政府行政院長の汪兆銘^{おうちょうめい}、タイのワンワイタヤコン首相代理殿下、満州国の張景恵^{ちやうけいけい}國務総理、フィリピンのラウレル大統領、ビルマのバー・モウ首相と、自由インド仮政府のチャンドラ・ボース主席が、一堂に集った。

日本はこの年八月にビルマと、十月にフィリピンを独立させていた。

大東亜会議は、有色人種のリーダーが集った、人類史上はじめての歴史的なサミットだった。

インドネシアは、オランダ領東インド諸島として知られていたが、日本の指導下で独立へ向けて、教育、行政制度の整備や、将来の国軍の訓練など、準備が着々と進められていた。

この会議において、アジアの各首脳が演説を行った。中国の汪兆銘行政院院長は、国父として仰いでいる、孫文の言葉を引用した。

「国父・孫先生が逝去される三ヶ月前に、『われわれアジアは過去百年にわたって、米英の侵略を蒙って衰微し、ほとんど独立国家としての存在を失ってしまったが、その衰微が頂点に達した時に、突然のように転換期が到来した。

すなわち日本の維新であつて、この日本の維新こそ、日本がアジアにおいて先進国となつた原因となり、アジア復興へ向けた出発点となつた。

アジア各国は、先進国日本と一心同体となつて協力し、西洋覇権文明を打ち破つて、米英の侵略勢力を完全に駆逐することによつて、アジア各国の独立自主を完成しなければならぬ』と、述べている。

孫先生は『日支両国は兄弟と同様であり、日本はかつて不平等条約の束縛を受けたために奮闘し、はじめてその束縛を打破し、アジアの先進国となつた。中国は現在、同様に不平等条約廃棄を獲得しようとしつつあり、日本の十分な援助を切望している』と説明した。

日本は一月に、世界に先駆けて、中国に租界を返還し、治外法権を撤廃した。

フィリピンのラウレル大統領は、「人類の歴史を振り返る時、このような大東亜諸民族の会議が開催されるべきであつたが、有史以来、われわれが今回、はじめて一堂に会したことに、深い感銘を覚える。ここで、世界へ向かつてわれわれが圧迫、搾取、圧政の悲運に再び見舞われることなく、十億のアジア民衆が強国の支配と搾取の犠牲にならないことを、高らかに宣言しようではないか」と、訴えた。

フィリピンは一五七一年に、スペインの領土となつた。一八九六年にアメリカが、スペイン領だつたキューバを奇襲して、アメリカ・スペイン戦争が始まると、アメリカはその二年後に、スペインからフィリピンを奪つた。

スペインによる支配から脱すると、フィリピンの民衆が独立を求めてアメリカ軍と戦つた。制憲会議が催され、フィリピン共和国として独立を宣言した。スペイン時代から、独立闘争を率いたエミリオ・アギナルドが、初代大統領に就任した。

アギナルド将軍は日本軍がフィリピンに進攻すると、日本軍を解放者として迎えて、協力した。

一八九八年からフィリピン軍がアメリカ軍と戦つて敗れ、アメリカの植民地となることを強いられた。このあいだに、五十万人以上のフィリピン人が殺戮された。

ビルマでは一八二四年、一八五二年、一八八五年に、第一次と第二次、第三次イギリス・ビルマ戦争が戦われ、一八八六年には、ビルマ全国が、イギリス領となった。

ビルマのバー・モウ首相は、大東亜会議を目の当たりにして、熱い感動が胸に込みあげたのを、抑えられなかった。

「私はこの会議に参加して、どのように深い感動を現したとしても、いいすぎることはない。私は多年、ビルマにおいてアジアの夢を見続けてきた。私のアジア人としての血が、つねに昼となく夜となく、他のアジア人に呼び掛けてきた。自分のなかで呼び掛ける声を聞いてきたが、この会議において、はじめて夢でないアジアの声を、聞いた。

大東亜戦争前においては、とうてい今日のごとき会合を、考えることができなかった。アジア人が一堂に集まるのが、できなかった。いま、私はアジア人のためのアジアの機構が、形成されつつあるのを、現実として見ている。

この会議によって、不可能な夢が実現した。これまで、われわれのなかの、もっとも大胆な夢想家でさえも、夢想することができなかった形で、現実となっている。

一千六百万人のビルマ人が、独立を求めて闘ってきたが、つねに失敗に終わった。それでも、われわれの愛国者は、何代にもわたって奮起し、民衆とともに打倒イギリスに進

した。

だが、われわれの敵に対する反抗は、かしこく 倅なく蹂躪された。今より二十年前に起きた全国的反乱では、村々が焼き払われ、むすめ 婦女子が凌辱され、志士は投獄、あるいは殺され、または追放された。それにもかかわらず、独立へのほのお 焔はビルマ人全員の心のなかに、燃え続けた」

インド人から感謝される日本

チャンドラ・ボースは、インドの英雄だった。

ボースはインドで「ネタジ（偉大な指導者）」と呼ばれて、ガンジー、ネールと並ぶ、三人のインド独立運動のリーダーとして、慕われていた。

ボースは、まず、ナポレオン帝国が崩壊した後のウィーン会議、クリミア戦争後のパリ会議、露土（ロシア・トルコ）戦争後のベルリン会議、第一次大戦後のベルサイユ講和会議、一九二二年の英米が太平洋支配を確実にしようとしたワシントン会議、一九二五年のロカルノ会議など、過去百年以上にわたる、主要な国際会議を列挙した。

「この大東亜会議と、かつて世界史上で行われた諸会議のあいだに、大きな隔りがある。

本会議は戦勝国間による、戦利品を分配する会議ではない。弱小国を犠牲にする陰謀の会議でも、弱小な国々を騙す会議でもない。この会議こそは、解放された諸国民の会議であり、正義、主権、国際関係における互恵主義、および相互援助の原則に基いて、世界のこの領域に新秩序を建設するものである」と、説いた。

そして、演説を『大東亜宣言』が全世界の被抑圧国民の憲章となることを、祈る」と、結んだ。

ガンジーとネールが、非暴力闘争を説いたのに対して、ボースは武力革命路線を主張して、ガンジー、ネールと袂を分かつた。

ヨーロッパで第二次大戦が勃発すると、イギリス官憲の厳しい監視の眼を潜って、インドを脱出して、アフガニスタンを経由して、ドイツに入って、協力を求めた。

ボースは昭和十八年二月に、ドイツのキール軍港からUボート（ドイツ潜水艦）に搭乗してアフリカの喜望峰を回って、マダガスカル沖で日本の潜水艦に移乗した。五月にスマトラに到着し、空路、東京に入った。

ボースは東京に到着すると、日比谷公会堂で雄弁を振るつた。

「約四十年前、私が小学校に通い始めたころに、アジア人の国が世界の巨人帝国だった口

シアと戦った。このアジアの国は、ロシアを破った。その国が、日本だった。

このニュースが伝わると、興奮の波がインド全土を覆った。インドのいたるところが、旅順攻撃や、奉天大会戦、日本海海戦の勇壮な話によって、沸き立った。インドの子供たちは、東郷元帥や、乃木大将を素直に慕った。親たちが競って、元帥や大将の写真を手に入れようとしたが、できなかった。そのかわりに、市場から日本製の品物を買ってきて、家に飾った。

このたび、日本はインドの仇敵であるイギリスに、宣戦を布告した。日本はインド人に、独立のための千載一遇の機会を、与えてくれた。われわれは心から、日本に感謝している。日本はアジアの希望の光である。この機会を逃せば、今後百年以上にわたり、このような機会が訪れることはないだろう。勝利はわれわれのものであり、インドが念願の独立を果たすと確信している」

『大東亜共同宣言』が、全会一致によって採択された。会議はアジア各国が協同互恵の原則のもとに伝統を重んじ、創造性を伸長して、文化を高揚し、経済を発展させ、「道義ニ基ツク共存共栄ノ秩序ヲ建設ス」と述べて、「万邦ト交誼ヲ篤ウシ、人種的差別ヲ撤廃シ、普ク文化ヲ交流シ、進ンデ資源ヲ開放シ、以テ世界進運ニ貢献ス」と、結ばれていた。

大東亜会議は世界史の転換点

大東亜会議は人類の長い歴史のはてに、アジア諸民族のリーダーが集って人種平等の理想の世界をうたった、世界史の大きな転換点だった。

一九四一年八月に、ルーズベルト大統領とチャーチル首相が大西洋の洋上で会談して、『大西洋憲章』を発した。『大西洋憲章』は「すべての国民がその政体を選択する権利を尊重する」と約束したものの、白人だけを対象としていた。

対日戦争中に、ルーズベルト大統領とチャーチル首相が、もっとも心配したのは、蒋介石政権が日本と和睦することだった。

万一、蒋介石政権が対日戦争から脱落して、日本と手を結ぶことがあったら、対日戦争が白人対有色人種の歴史的な「人種戦争」となってしまふ。

そのために、アメリカは蒋介石政権が腐敗しきっていたことを、よく承知しながら、資金を惜しみなく供与し、大量の軍事援助を注ぎ込まざるをえなかった。

日本軍がマレー半島を南下して、シンガポールへ向かう途上、「F機関」として知られる諜報部隊の藤原機関が、イギリス軍のインド兵に脱走するように呼びかけた。インド兵

がつぎつぎと投降し、日本軍に協力したいと申し出た。その数は四万五千人を超えた。

シンガポールが陥落すると、これらのインド将兵によって、インドの解放を願って、インド国民軍（INA）が結成された。

昭和十九（一九四四）年三月から、日本軍とインド国民軍が協同して、ビルマからインド東北部のインパールを目指して、インド領内へ進撃した。

日本軍はインド洋に列なる、インドのアンダマン諸島を占領していたが、ボースがここにインド仮政府を樹立して、主席となった。

ボースは、東京からシンガポールに入って、インド国民軍を指揮した。

ボースは「チャロ・デリー」（デリーへ！）と進撃を宣言し、将兵がそのスローガンを掲げ、勇壮な行進歌『チャロ・チャロ・デリー』を歌いながら、進軍した。

祖国インドへ向けた、歴史的な進撃だった。

インド国民軍の将兵は、日本軍とともにインド・ビルマ国境を越え、インパールを目指し「チャロ・デリー」と雄叫びをあげながら、進撃した。ボースは「われらの国旗を、レッド・フォートに掲げよ」と、将兵を激励した。

レッド・フォートとは、ニューデリー旧市街のデリーにある、ムガル帝国時代（一五

二六（一八五八年）の壮麗な城である。赤い石を用いて築かれているから、そう呼ばれている。

世界的に有名な歴史家のアーノルド・トインビーは、一九五六（昭和三十一年）年にイギリスの高級新聞『オブザーバー』紙（十月二十八日）に、次のように寄稿している。

「日本は第二次大戦において、自国ではなく、大東亜共栄圏の諸民族に思いがけない恵みをもたらした。

それまで、アジア・アフリカを、二百年以上の長きにわたって支配してきた西洋人は、無敵で、あたかも神のような存在だと信じられてきたが、日本人は人類の面前でそうではなかったことを、証明してしまった。これは、まさに歴史的な偉業であった。

日本は白人のアジア侵略を止めるどころか、帝国主義と植民地主義と人種差別に、終止符を打つことを成し遂げた」

日本軍に協力した現地人

ヘンリー・S・ストークスは一九六四年から、ニューヨーク・タイムズ紙、ファイナンシャル・タイムズ紙、ロンドン・タイムズ紙の東京支局長を歴任した。

ストークスは日本がアジアを解放し、大東亜会議が世界史の発展に大きな役割を果たしたことを、つぎのように高く評価している。

「第二次大戦時の、東南アジアにおけるイギリス、アメリカ、オランダの植民地において、日本の『第五列』活動が成功したのは、日本軍の進攻がアジア諸民族を、欧米の帝国主義から解放し、独立に導くものだったからだ。

日本軍はアジアを支配するために、侵略したのではなかった。日本は植民地となっていた人々に教育を施し、軍事訓練を行い、独立の手助けを行った。

日本軍に支援されて、インド国民軍総司令官となったチャンドラ・ボースは、『日本はアジアの希望の星だ』と語り、日本に深く感謝した。

マレーシアや、シンガポールも、同じことだった。アジアを白人支配から解放する大義があったからこそ、インテリジェンスが成功し、イギリス軍はなすすべもなく、降伏した。今日、日本の多くの学者が、大東亜会議は日本が『占領地の傀儡』を集めて、国内向けの宣伝のために行った会議だったと、唱えている。

しかし、このような日本人こそ、日本を支配し続けようとする、戦勝国の傀儡というべきだ」と、説いている。

第五列は「敵に内通して助ける国内勢力」を意味している。日本軍が進攻すると、現地人が日本軍に、積極的に協力した。インテリジェンスは、諜報活動のことだ。

ところが、日本の学校教科書や、辞典では、大東亜会議を「宣伝のために、占領地の傀儡」を集めて開催したもの」としている。

『広辞苑』によつて、「バーモ」の項目をひくと、「ビルマ（現ミャンマー）の政治家、民族運動指導者（中略）第二次世界大戦下、日本軍がビルマに侵攻した際には、日本軍と協力して、反英運動を展開。四三年八月には日本の傀儡政権ではあるが、『独立』を達成し、国家代表の地位についた」と、説明している。

平凡社『世界大百科事典』には、大東亜会議の項目がないし、大東亜会議という言葉すら、まったくでてこない。「大東亜共栄圏」が短い項目としてあるが、「大東亜共栄圏 太平洋戦争当時、日本の中国ならびに東南アジアに対する侵略政策を合理化するために唱えられたスローガン」ということから、始まっている。

どうして、日本の辞書や、百科事典が、戦勝国史観を宣伝しなければならないのだろうか。

第四章 アジア諸民族を鼓舞した気高い精神